

項目	内容
1. 国内	(1) 生産・処理動向調査(一社)日本食鳥協会令和4年2月末実施)によると2月の推計実績は処理羽数57,360千羽(前年比100.1%)・処理重量177.1千t(同101.9%)となった。前月時点の計画値より処理羽数は1.4%下方修正し、処理重量は1.7%上方修正となっている。処理羽数は減少したものの、一部処理農場における処理工場の稼働停止によるやむを得ない日齢延長等により前月時点から処理重量が増加したのではないだろうか。
	(2) 3月の処理重量は処理羽数の増が要因で前年を上回る見通しとなっている。コロナ禍による処理工場の操業一時停止等の影響からの回復ではないだろうか。一方、4月については処理羽数が前年を上回っているものの、処理重量は前年を下回る見通しとなっている。一部産地で大腸菌症等が発生しており、増体が悪化しているようだ。また、新型コロナウイルスによる工場稼働への影響や海外技能実習生が集められないことから要員不足となっている処理工場もあり、加工品(手羽中・二ツ割・砂肝スライス等)や副産品(小肉・ハラミ等)の調整が今後も見込まれる。
2. 輸入	(1) 財務省3月30日公表の貿易統計によると令和4年2月の鶏肉(原料肉)の輸入量は前月から4.2千t減の49.6千tで、国別ではブラジルが▲3.8千t、タイが+0.4千tとなっている。前年同月の実績に対しては4.1千t増となった。国内在庫の減少や、近年流行しているテイクアウト向け需要(中食)の高まりから、加工向けの引き合いが強まったと考えられる。農業畜産振興協議会(ALIC)による今後の見通しでは、3月が42.9千t(前年比77.1%)、4月が39.5千t(前年比78.8%)となっている。輸入業者買い付け時のブラジル産オファー価格の高騰、飼料・人件費・物流費等、世界的なコストの高騰、12月から1月にかけての干ばつの影響によるブラジルの減産、タイにおけるASF(アフリカ豚熱)感染拡大などから輸入価格は今後も上昇し、先々では輸入量が絞られるのではないかとの声も聞かれる。
	(2) 鶏肉調整品の輸入量は前月から4.4千t減の38.8千tで、国別では中国が▲5.1千t、タイが+0.6千tとなった。前年同月の実績に対しては4.6千t増となった。コロナ禍により工場稼働が落ちていると言われていたが、前年を上回る水準まで回復していると考え、今後は、まん延防止等重点措置の解除により外食向けの引き合いが強くなることが予想されるが、世界的なコスト増もあり価格が高騰している。
	(3) 3月の輸入鶏肉の価格は、前年同月より50%前後上昇し、依然として高騰が続いている。ロシアのウクライナ侵攻(両国とも穀物主要輸出国)に伴う黒海封鎖、前述のブラジルにおける干ばつ等の影響で穀物相場の高騰は避けられない。また、EU・中東圏をメインに輸出されるウクライナ産鶏肉の輸出が止まっていることも高値が続くことの要因になっていると考えられる。
1. 家計消費	(1) 総務省統計局発表の家計調査報告(全国・二人以上の世帯1世帯あたり)によると、令和4年2月の生鮮肉消費(購入)は数量4,097g(前年比100.7%)、金額6,090円(同99.7%)と数量は前年を上回ったものの、金額は前年を下回った。鶏肉は数量1,483g(同103.9%)・金額1,404円(同103.3%)と、前年を上回る結果となった。単価については94.6円/100g(前年同月▲0.5円)で前月同様、前年を下回った。調理食品が金額11,103円(同104.3%)、外食が8,171円(同92.3%)となっており、コロナ禍による2月のまん延防止等重点措置があった影響から中食・外食から内食へ消費が一部シフトしたと考えられる。
2. 量販・卸	(1) 食品関連スーパー3団体の販売統計速報によると、令和4年2月の食品売上高は全店ベースで前年比102.6%と前年を上回った。生鮮3部門の売上高は全店ベースで同101.8%、既存店ベースで同100.0%となった。また、畜産部門の売上高は約1,098.9億円(前年同月比102.0%)、既存店ベース(同100.1%)ともに前年を上回った。「家庭内食事需要の拡大により、全体的に、販売に回復傾向がみられた。気温が低めに推移したことから、鍋関連商材の動きがよかったが、焼肉関連は前年好調の反動もみられた。牛肉は、国産の価格には比較的低めに推移したが、輸入牛は価格高騰が続き、販促も打ちにくく伸び悩んだ。比較的低価格が安定している国産豚肉や、鶏肉は比較的好調に推移した。ハムなどの加工肉は前年を下回った店舗が多い。」と報告があった。今後は気温の上昇から鍋物需要は弱まり、焼き商材へシフトしていくことが予想される。
3. 業務・加工筋	(1) 日本ハム・ソーセージ工業協同組合調べによると令和4年2月度の鶏肉加工品仕向肉量は、前年比95.6%の3.9千tとなった。うち国内品は同97.2%の3.2千tと前年を下回り、輸入品についても同89.0%の0.7千tと前年を下回った。
1. 令和4年2月(2022年2月)	(1) (独)農畜産業振興機構の推計期末在庫では国産33.9千t(前年比123.2%・前月差▲1.2千t)、輸入品129.3千t(同99.7%・同+6.1千t)と合計で163.2千t(同103.8%・同+4.9千t)となった。
	(1) (独)農畜産業振興機構が発表した鶏肉需給表(令和4年4月6日更新)では、2月の出回りは国産136.5千t(前年比104.9%・前月差▲1.0千t)、輸入品43.5千t(同96.0%・同▲1.5千t)と合計で180.0千t(同102.6%・同▲2.5千t)となった。3月以降の国産在庫については、競合する輸入鶏肉の高騰等から消化が進んでいる。輸入鶏肉の入荷量は前述の農業畜産振興協議会(ALIC)予測でもあるように在庫の消化が進み、在庫水準がさらに高くなる可能性は低いと考えられる。国内の輸入品在庫水準は一時的に増加しているものの、前述のブラジル産オファー価格の高騰、黒海封鎖、タイにおけるASF(アフリカ豚熱)感染拡大などから輸入量は絞られることが予想されるため、今後の輸入品在庫は減少していくと予想する。
1. 令和4年3月動向	(1) 令和4年3月の月平均相場は、モモ肉631円/kg(前月差▲15円)・ムネ肉316円/kg(同▲7円)正肉合計で947円/2kgと前月差で22円下回り、前年差では48円下回った。モモ肉相場は月初640円、月末は625円までの15円の下がり幅であり、昨年は月初694円、月末687円の7円の下がり幅であった。野菜価格が比較的安定していたことも手伝い鍋物需要はある程度あったものの、全国的に需要に対して供給量が潤沢であったことや、東日本の一部地域を除き気温が平年よりも比較的高かったこと等から相場の下がり幅は前年を上回ったと考えられる。ムネ肉相場は年末に凍結した在庫の消化や在庫積み増しを回避する動きから下げ基調であったが、競合する輸入鶏肉の在庫水準が低いこともあり前月から7円の下げに留まった。
2. 見通し	(1) 4月の生産量は、産地の増体悪化により若干減少する可能性がある。また、コロナ禍による工場稼働への影響も懸念される。一方需要面では、気象庁発表の「向こう1か月の天候の見通し(4月)」によると、4月の気温は全国的に平年よりも高い予測となっており、鍋物需要は落ち着くだろう。代わって、焼き商材の動きが良くなることに期待したい。まん延防止等重点措置が解除され、一時的に外食へ消費が傾くことが予想されるものの、外食で使用する輸入鶏肉の価格高騰から国産鶏肉へ一部シフトするのではないだろうか。以上から、モモ肉相場は3月より若干下げの月平均625円前後と予測する。ムネ肉相場は加工原料としての引き合いが依然として強く、競合する輸入鶏肉の高騰からやや上げの月平均320円と予測する。
(2) 今後、肉用鶏・種鶏農場で鳥インフルエンザが発生した場合は規模にもよるが、需給バランスが崩れ相場への影響も懸念される。また、輸入鶏肉については価格が高騰しており、国内在庫が減少する可能性が高いため、国産鶏肉への需要シフトを期待したい。	

実績

生産状況 単位:千羽、千トン、%

	R4年2月推計実績		R4年3月計画		R4年4月計画		R4年5月計画	
	数量	前年比	数量	前年比	数量	前年比	数量	前年比
入雛羽数	59,044	99.9%	63,467	98.9%	64,147	101.1%	62,901	100.3%
処理羽数	57,360	100.1%	65,736	102.2%	62,668	101.1%	61,368	100.7%
処理重量	177.1	101.9%	197.0	101.5%	187.7	99.8%	182.9	98.3%

※参考資料: ㈱全国食鳥新聞社発行「PMN」

輸入動向 単位:千トン、%

品名	鶏肉			調製品			合計			比率	
	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比	鶏肉	調製品
R3年9月	45.2	41.5	109.0	31.8	35.2	90.3	77.0	76.7	100.4	58.7	41.3
R3年10月	51.2	47.9	106.9	35.2	39.2	89.8	86.4	87.1	99.2	59.3	40.7
R3年11月	57.8	45.3	127.5	43.8	42.7	102.4	101.5	88.0	115.3	56.9	43.1
R3年12月	60.7	42.7	142.1	48.2	44.1	109.2	108.9	86.8	125.4	55.7	44.3
R3年累計	595.8	535.0	111.4	481.0	469.5	102.5	1,076.8	1,004.5	107.2	55.3	44.7
R4年1月	53.8	48.9	109.9	43.2	33.7	128.3	97.0	82.6	117.4	55.5	44.5
R4年2月	49.6	45.5	108.9	38.8	34.2	113.3	88.4	79.8	110.8	56.1	43.9

※参考資料: 財務省「貿易統計」、(独)農畜産業振興機構「鶏肉需給表」

鶏肉の消費動向 単位:グラム、円、%

履歴	数量			金額		
	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比
R3年9月	1,546	1,401	110.3	1,383	1,327	104.2
R3年10月	1,559	1,538	101.4	1,424	1,424	100.0
R3年11月	1,536	1,498	102.5	1,429	1,425	100.3
R3年12月	1,695	1,839	92.2	1,702	1,763	96.5
R3年平均	1,526	1,565	97.5	1,410	1,440	97.9
R4年1月	1,563	1,582	98.8	1,450	1,469	98.7
R4年2月	1,483	1,428	103.9	1,404	1,359	103.3

※参考資料: 総務省統計局HP「家計調査報告(全国・二人以上の世帯1世帯あたり)」

相場(年別・暦年) 単位:円

	モモ肉	ムネ肉	計
H26年	626	294	920
H27年	639	336	975
H28年	621	255	876
H29年	626	315	941
H30年	595	282	877
R元年	585	243	828
R2年	614	269	883
R3年	641	313	954

在庫状況(推定) 単位:千トン、%

履歴	国産			輸入品			合計		
	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比
R3年9月	33.8	27.8	121.6	107.6	138.4	77.7	141.4	166.2	85.0
R3年10月	34.7	26.8	129.3	108.2	134.1	80.7	142.9	160.9	88.8
R3年11月	33.6	26.4	127.0	114.7	131.3	87.4	148.2	157.7	94.0
R3年12月	35.5	26.8	132.2	114.4	124.3	92.1	149.9	151.1	99.2
R4年1月	35.1	26.5	132.4	123.2	129.5	95.1	158.3	156.0	101.5
R4年2月	33.9	27.5	123.2	129.3	129.7	99.7	163.2	157.2	103.8

※参考資料: (独)農畜産業振興機構「鶏肉需給表」

相場(月別) 単位:円、%

品名	モモ肉			ムネ肉			正肉合計		
	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比
R3年12月	641	687	93.3	340	311	109.3	981	998	98.3
R4年1月	649	711	91.3	330	314	105.1	979	1,025	95.5
R4年2月	646	701	92.2	323	305	105.9	969	1,006	96.3
R4年3月	631	691	91.3	316	304	103.9	947	995	95.2
R3年度平均	627	640	98.0	317	283	112.0	(944)	923	102.3
R4年4月	(625)	678	92.2	(320)	305	104.9	(945)	983	96.1
R4年5月	(615)	659	93.3	(330)	303	108.9	(945)	962	98.2

※()は見直し ※()は見直し